
魔法少女まどか マギカ 要するにバッドエンドは嫌いなんだろう？

花林糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ 要するにバットエンドは嫌いなんだろう？

【Nコード】

N3522V

【作者名】

花林糖

【あらすじ】

色々書き直しました！あときは頭が逝かれてどうかしていた物で・・・新しく書き上げたので見てやってください。

その男は強かった。最強の身体能力、最強の技、そして魔女を触れる体質。魔女も何も知らなかったその男が、この不条理な世界を全て覆す。——自らの命を削りながら……。その男によりある少女は死を免れ、ある少女は絶望せず、ある少女は救われ、ある少女は

存在を消されず、そしてある少女の永遠とも思われる長い旅が終わる。そんな男の最後の物語・・・。

エピソード？そんなものだね。（前書き）

ごめんなさい。ちょっと頭が逝かれてへんな文章を書いてしまいました。すいません。書き直したのでそちらを見てやってください。お願いします。

エピソード？そんなものだね。

今日も太陽は元気だなあ。無駄なくらいに。俺は朝起きてまず最初にそう思った。

俺の名前は――。まあ、どこにでもいるような普通の名前だ。みんなからは愛称で「お兄ちゃん」「兄貴」などと呼ばれている。何故兄なのかは全く分からない。男子も「兄貴！」とか「兄ちゃん」と呼んでいる。ついでに中学二年生。

そんな俺なんだが実はよく分からない能力を隠し持っていたりする。大丈夫、頭の中はイカれてないぜ。まあその能力なんだがなんと！二つある。

一つが身体能力を上げるもので、もう一つは格闘技や險技のような技が全て使えるようになるものだ。もう一つあるんだがそれは能力じゃなくて体質っぽい。まあとにかくこれを使えば、遅刻は絶対しないし、喧嘩も絶対に負けない。便利だろう？

まあそんなこんなで布団に潜っていたら、いつの間にか七時五十九分というヤバイ時間になっていたわけで。

急いで着替えて、昨日の夜作って置いたパンを食べつつ走る。ここから速度の維持を気にしながら急いで行けば二十分で着く。とにかく人にぶつからないようにと思い家を出て鍵を閉め、走り出した。

俺には親がない。いつだったか俺がまだ餓鬼で幸せな、姉、妹、父、母、俺の五人家族で暮らしていた頃、父と母がいきなり喧嘩をしだし俺たちに・・・いや、姉と妹に虐待をし始めるようになった。それで何年かして姉と妹と一緒に首つり自殺をし、それを見た父と母が狂ってしまい殺し合いをした挙げ句両方とも死んでしまった。何故か俺はそのまま生きていて、親戚にたらい回しされることにな

ったが不幸の子だの何だので結局最初に住んでいた自分の家に戻ってきて一人で暮らしている。少し前まではガタガタ音が鳴ったりドアがいきなり閉まったり、鏡に姉と妹が写っていたりしたがそれも慣れてきた。てゆうかもう、全然出てこない。なんでだろ？

まあそんな感じで暮らしてきた。今は学校に通っており結構充実した日を過ごしている。弁当忘れましたけどねー。

「おっ？ やつと見えてきた」

けど校門は閉まっている。やっぱり無理があつたか。

「関係無いけどねー」

そう呟き、走るスピードを上げて校門を飛び越す。余裕だな。

「ガフツ！ー！」

と思つたらそうでも無かつた。普通に校門の門の所に足を引っかけてしまい、盛大に転びつつもそのまま前転の最後のように綺麗に立ち上がる。それで走る。

教室の前まで来てからどうやって入ろう？ と思い、後ろからコソコソ入ろうと思つたが何となくそれは嫌なのでそのまま前のドアを思いっきり開ける。

「すみません！ 遅れました！」

堂々と言い切る。シーンと静まりかえっている教室。前には先生と見知らぬ美少女が。

「え、えつと・・・兄君。もうちょつと空気を読んで入ってこようね・・・?」

早乙女先生、マジですいません。

「ええつと・・・あつはい。マジですいませんでした」

頭を下げて自分の席——真ん中の列の一番後ろに座る。

「また遅刻か?」とか「もうちょい空気読んで入ってこいよ」とかなんか色々言われてきたので「あゝ、はいはい」といつてスルーして置いた。

「はいはい！静かにしましょう！ええーつと、見ての通り転校生です。その遅刻してきた子のためにもう一度紹介をお願いしてくださいませんか?」

うつ！あの先生、こつち睨みながら言うなよ。もうちょい遅く来ればよかったつ！

「・・・曉美ほむらです。よろしくお願いします」

「・・・えつ?それだけー?」

「はい！じゃあ、曉美さんは——」

なんてつまらない自己紹介なんだ・・・！もつとこつ、俺が来たときみたいにドバーツ！つとやってもらいたかったな。

つてアレ?ええつと・・・曉美さんがこつちを睨んでくるぞ・・・。なんだ?そんなに空気読まなかったのがむかついたのか?

これは、謝つとくか。

でっ、謝ろうとしたら転校生と言う理由で女子の大群が・・・！
っ、あそこは突破できない・・・！
もうめんどくさいので最近一緒にいる鹿目まどか、美樹さやか、志
筑仁美の所に行く。

「随分と人気だな。あの転校生」

「んー？ああ、KY君か。そうだねー？なんかまどかにガン飛ばし
てみたいけど」

「さ、さやかちゃん。お、お兄ちゃんはKY君じゃないよ。確かに
朝はアレだったけど・・・」

「いえいえ、まどかさん。朝の行動はさすがに・・・」

「話しかけたとたん罵倒される俺は何なんだろう・・・」

いきなり心にグサグサくる言葉を言われ、少々気分が落ち込んでい
るように見せかける。ふっ、俺完璧。

「ほ、ほらっ！落ち込んだじゃったよお。お兄ちゃん、ごめんね」

おお！まどか！ありがとう！やっぱお前は俺の女神様だ！

「どーせまた『振り』でしょう？引つ掛かるわけ無いでしょう？」

けっ！さやかはこうゆうヤツだ。もう慣れた。

「ふふつ。やっぱり面白いお方ですね。お兄様って」

それはどういう意味ですかな仁美君。取りようによっては馬鹿にしているように聞こえるぞこのやろ！。
そんな風に雑談していると、

「鹿目さん」

「・・・へっ!？」

暁美さんがいきなり話しかけてきた。なんてこったい。もう、謝らないけど。

「あなた、保健委員よね。保健室、連れて行ってもらえる？」

「えっと・・・うん」

おう、恐い恐い。なんだか威圧感がありますなあ、この子。あつ、俺もついていこう。やっぱ謝りたいし。

「おっと、じゃあ俺も行かしてもらっぜ。ちょっと君——暁美さんと話したいこともあるからな」

「・・・私も話したいことがある。行きましよう」

そう言って歩き始める。暁美さんが教室を出る辺りで、ぼーっとし

ているまどかの目を覚まさせ急いで追いかけに行った。

エピソード？そんなものだね。（後書き）

うん、微妙だったね。

第一話。ヘンなヤツ。そして腹がヤバイ。（前書き）

今日も今日とてカキコカキコ。まどマギのアニメを見てない割には結構書けていることにびびる自分。もう、前書き書かないよ。

第一話 ヘンなヤツ。そして腹がヤバイ。

「こっちよね？」

「う、うん」

何だか俺らが案内されてるみたいだな。それにこいつ何だかヘンだぞ？俺の『目』がヘンだと言っている・・・。

俺のもう一つ的能力、みたいな体質。俺は幽霊とかヘンな力？まあ霊力とか何だけど、その流れてゆうかなんてゆうか・・・とにかく、そういう物が見える。

ついでに触られる。そんな体質らしいんだ。ある神社の神主さんから教えてもらった。まあ、その神主さんは死んじやったのだが。

「あ、あの暁美さん・・・？」

「ほむらでいいわ、何？」

「あ、え、えつとあのねっ」

何だか考え込んでいる内にまどかがパニックってるぞ？どうしたんだ。

「ほむらちゃんとわたしって、前にどこかで会った・・・かな？」

「・・・・・・・・・・」

「あ・・・なんちゃって・・・そんなわけないよね？」

ん？こいつ、なんで悲しい目をしてい——あつ戻った。

「鹿目まどか」

「は、はいつ——！」

どんだけ緊張しているんだまどかは。

「あなた、家族や友達のこと大切だと思ってる？」

「え……？」

「どうなの？」

いきなりなんだこいつは。電波か？

「……もちろん大切だと思ってるよ？家族も友達も、みんな大好きだもん！」

まあ、まどかならそう答えるよな。俺は……って俺の事は聞いてねえよ。俺。

「……そう。なら忠告しておくわ」

雰囲気になにか重苦しくなる。こいつ、何か隠している。わかりやすいなあ。

「その気持ちが本当ならこれだけは守って。この先何が起ころうとも『自分を変えよう』だなんて決して思っては駄目。でなければ……」

」

——あなたの大切なもの、すべて失うことになるわ

「・・・・・・・・・・ほむら・・・ちゃん・・・？」

保健室にいつの間にか着いていたようだ。ドアを開けて曉美さんが入っていく。

「・・・・・・・・・・それとあなた」

「俺に何かようか？」

こちらに振り向いて、話しかけてきた。

「話し合いはまた後でにしましょう。でも、これだけは言うておくわ。邪魔をするなら——」

「はっ！容赦はしないってか？」

見えた。見えてしまった。こいつのヘンな部分。

「っ・・・・・・・・肝に銘じておきなさい」

そう言って、保健室に特異な人間が入っていく。
ドアが閉められると、重苦しい雰囲気はどこかへ行ってしまった。

昼休み。俺は弁当を忘れた事実を思い出し、渡り廊下にある休憩用のベンチで頂垂れていた。腹が、減ったあ。

そうやって無意味な時間をだらだらと過ごしているとあの特異な人間、暁美ほむらが俺をガン見しながら近づいてきた。

「なんだー・・・俺は今、腹が減って死にそうなんだ。飯を分ける」

「・・・そんな物、もう食べてしまったわ。それよりあなたに話したいことがある。いえ、聞きたいことがある、の方が正確かしら？」

なんだい食い物持っていないのか。じゃあ、どうでもいいや。

「でっ、なんだ。その聞きたいことってのは」

「あなた、一体何者？」

「・・・・・・・・・・・・はっ？こいつ何いってやがるんだ。」

「じゃあ、お前は何者なんだよ。ヘンな力を使ってるヤツなんだろっ？」

そう答えるとカッ！と目を見開いてくる。俺もそれにびびってしまった。

「・・・・・・・・・・・・明日の放課後、屋上に来なさい。そのときにあなたに話してもらうわ」

そう言って踵を返し、またどこかに行ってしまう。なんか、かつてに予定を作らされたな。暇だったからいいけど。

「そんなことより、誰か飯を分けてくれねーかなあ・・・」

そんなことを呟いてみる。昼休み終了のチャイムが鳴った。

「結局、あと二時間は地獄だな・・・」

少々ちゃんとしないうちで、教室に向かうのだった。

第一話。ヘンなヤツ。そして腹がヤバイ。（後書き）

何を書けばいいのか全く分からない。取り合図読んでくれてありがとう。これからもよろしく頼む。

第二話。ちよつとの本気と魔女の使い間。あとは魔法少女とへんなモフモフ。

学校が終わるとすぐにクラスの全員に挨拶をし、能力を使い家に十五分で帰ることに成功した。腹が減っても逆に力が出るようだ。

そんなことを思ってる内に財布を手に持ち、外に出ていた。軽く走りながら街に向かいつつ、財布の中身を確認する。

一万円札五枚。五千円札二枚。千円札一枚。小銭が八百九十九円。

よく考えたら前に新しいテレビを買おうと思い街に出かけたが、アイツに会って一緒にゲーセンで遊んじまったんだった。通りで千円札が少ないわけだぜ。

そんな思いに耽っていたら街にたどり着いた。無論いつものお店に行き飯を食いながら可愛い女性の店員さんと世間話をし、暇つぶしにCD屋にでも行こうと思った。

「そんなわけでCD屋の前。ばったりまどかと遭遇。まどかは何かに導かれるような感じでどこかに走っていく。ミッシュンスタート尾行開始」

そのまま走っていると、なんだか頭に「助け・・・て・・・」と声が聞こえてくる。もしかしてこれを頼りにまどかは走っているのかも。

「ん？ここは・・・関係者以外立ち入り禁止区域ではないか。えっちょ！入っちゃったし。・・・俺も行くかあ」

そのまままどかに続き慎重に入る。もちろん、ばれないようにだ。

《助けて・・・》

走っていくとどんどん声が大きくなってくる。やはりこの声をまど

かは聞いているみたいだ。

「どこにいるの!？」

おっと、しゃべり出したら何かが起こる合図だ。物陰に隠れよう。

《う・・・》

「あ・・・っ、あなたなの?!」

ほら、何か見つけたよ。こっそり覗くとなんだか兎と猫を掛け合わせて兎の耳を長くした白いモフモフな生物がいた。なんだアイツ・・・可愛い。

「そいつから離れてっ!!」

おっ?アレは・・・やっぱり。特異な人間だったな。今ならはつきりとお前の・・・霊力とは違う力が見えるぜえ。

「ほ・・・ほむらちゃん!？」

「そいつを渡して」

《ひい!》

悲鳴みたいな声が頭に響いてくる。なんだあの生き物・・・?

「相変わらず汚い真似をするのね・・・」

「ほむらちゃんがやったの?ダメだよこんな事!」

「鹿目まどか、あなたには関係無いわ」

「どいて。あなたを傷付けたくはないけどどこかないというのなら・・
」

そろそろ俺は出て行っただ方が良いのかな？何かやばそうな雰囲気だし。

「まどかつー！」

っと思っただらさやかが出てきて消化器の中身をほむらにぶちまけた。
おう・・・俺の出番潰すなよ。

「な・・・」

「逃げるよまどか！」

「さやかちゃん！」

おっ？どっか行っちゃう・・・ここはまどかに付いて行くべきそう
すべき。さらばだほむら！

あるえー？まどか達が消えちゃった。てゆうかここどこ。まさか・
・この年で迷ったか！？

「って、はいっ？」

何だかヘンな場所に来ているみたいだ。俺が何かの力に取り囲まれてしまった。なんかカオスワールドな雰囲気。

そしてさらに！毛玉にカイゼル髭を生やしたヘンな生き物がいるではないか！えっ？ナニコレ？俺にどうしろと？

そんなことを思っていたら襲われた。ヘンな鋏で攻撃してくる。ふっ、俺に能力があることを忘れたか！馬鹿め！

その攻撃を身体能力をちよつと上げ全て躲す。余裕余裕。

「攻撃されたらやり返すのが俺の性でな。悪く思ふなよ！」

もう一つ的能力を使い縮地法で相手との距離を一気に詰めた。

「行くぞお！ただの蹴りい！蹴り蹴り蹴りい！」

小っちゃいので適当に蹴りを入れまくる。一発で一匹消えるので、とにかく蹴ってみる。

蹴り続けること二分ほど。取り合図目に見える髭毛玉は蹴っておいた。でもこの結界から出る方法が分からん。

どうしようと悩んでいると、前から黄色い服で黄色い髪をぐるぐる巻きにした少女とまどかとさやかがいる。無事だったのか。あつ、白いふわふわもいた。ついでに曉美さんも。

そう思い取り合図まどか達に声をかけようとする、いきなり黄色い服の人が銃的な者を取り出し俺に向かって「座って！座ってえ！」と叫んでいる。まどか達も同じ事を叫んでいるなあ。

おいおい俺の後ろに敵がいるみたいじゃないか。

そんなことを思ったら、首に例の鋏があった。

瞬間、身体能力を自分の出来る限界まで上げ後ろを振り向き手刀で
鋏を持っている蔓みたいなのを切り上げる。

それは音を置き去りにして放たれた一撃だった。ギャンツ！と音が
するとすでに髭毛玉は手刀の斬撃で斬られていて、蔓も綺麗に切れ
ていた。

みんな啞然としている。まどかも、さやかも、あの金髪グルグルさ
んも、白いふわふわな生き物も。そして暁美さんも、みんながみん
な啞然としていた。

その中で俺は一人溜息をはき、どう説明するかぁ・・・と誰にも聞
こえないような声で呟いた。

第二話。ちよつとの本気と魔女の使い間。あとは魔法少女とへんなモフモフ。

書いててこれは楽しかった。ついでに暴露。

実はこの小説、思いつきで全部書いてるんだ！だからこんなにもへんな文章なんだよ。まあ、このままいくつもりでもあるけど。

第三話。喧嘩っばいのと魔法少年。ついでに俺は紳士だ。（前書き）

作者も紳士なのさ。ところでコレを俺はいつ書いたか分からない。
読み返してもいない。これがどういうことか、読んでる諸君には分かるかな？

第三話。喧嘩っばいのと魔法少年。ついでに俺は紳士だ。

結論を言うと、また今度話をするということに納得してもらえた。

うん、端折ったことは謝るよ。でも後悔はしていない！……………

……あれ？俺は何を言っているんだ？

まあいいや。なんかその後あの白いふわふわ——キュウベえの怪我を治したりした。

そして今、なんだか緊張感あふれる場面に直面している。

暁美さんが出てきて、金髪グルグル——巴マミというらしい——がなんか喧嘩腰で暁美さんを追い払おうとしている。

「私があるのは……………」

「飲み込みが悪いわね。見逃してあげるって言ってるのに。お互い余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

ひいー！マミさんが恐いよー。（棒読み）こんな緊張感あふれる場面では「今日の夕飯どうしようかなあ」とか考えている。だってどうでも良いんだもの。

睨み合った末、暁美さんが立ち去ることになったっぽい。一瞬表情が悔しいそうだったのは何故なんだろう？気のせいかな？

「ありがとうマミ！お陰で助かったよ！」

立ち去ったあと、キュウベえが静かな沈黙を破った。するとみんな体の力を抜いていく。ついでに俺は夕飯のメニューが親子丼に決ま

った所だった。

「おれはこの二人にいつて。私じゃ間に合わなかったかもしれないもの」

「うん！ありがとう、まどか！さやか！」

「なんで名前知ってるの！？」

「まさか貴様あ！俺を差し置いてさやか達をストーキングしていたと言っのか！？俺も誘えよ！」

「え、えーっと・・・」

いきなり俺が話しに乱入したことで、マミさんが戸惑っている。可愛いですねー。

「ちょっと、兄貴はうるさい。黙ってて」

「な！さやか！俺はお前をそんな風に」

「お兄ちゃん、ちょっとうるさいかも」

「はい、すみません。まどか様」

「あつ、あはははあゝ・・・」

ほら！マミさんが困ってるじゃないか！もつと喋らせ・・・まどか様すみません。だから睨まないでください。心を読まないでください。

さやかもその目はやめて！俺が凍っちゃう！

「じゃあ、さつきは軽く自己紹介しただけだったから改めてちゃんとするわね」

そう言うとなんだか光っぱいのに包まれ、俺たちの学校の制服になつてゆく。

「私の名前は巴マミ。あなたたちと同じで見滝原の生徒よ。三年生だけどね。よろしく」

「変身した！？いや、変身解けた！？」

「いえ、こちらこそ！」

「よろしくお願いします！あなた様のような可愛い・・・まどかは何故俺を睨む。あるえー？フラグ建てたっけ？」

おつかしいなあー。いつ建てたっけ？まさか、純粹に俺の事を好きになっていたとか？・・・いやいやないない。

「あ、あははは・・・それでこっちが私の友達、キユウベえよ」

「よろしく！それで早速お願いがあるんだ。まどかさやかそれに・・・——君」

なんとなく、乾いた笑い声を上げて現実逃避していると名前を呼ばれた。なんだよ。

「お願い？」

「あたしも？」

「うん、君たち三人にだ」

なんだよ、早く言えよ。そういうもどかしいのは嫌いですうー。

「あのね、僕と契約して・・・」

——魔法少女、魔法少年になつてほしいんだ

その後夜に集まり少々の説明で解散になった。今は家への道をのりくらしと歩いている。

俺の家はまだか達の家を通りさらにその先にあるのでとてもめんどくさい。あつ、まだか達はもちろん送り届けましたよ？紳士ですから。

それであのママさんは魔法少女らしい。まあ俺も見えたから信じられる。こんな時に便利だなあ、俺の体質は。

まあそれで魔女の事やらなんやらを説明してもらった。願い事が何でも叶えられるのは魅力的だがその対価として魔女と闘うのはめんどくさいなあ。

それにあのキュウベえ。まだ何かを話していないと思う。てゆうか色々疑問に思うこともあるし。たとえば・・・いつまで魔女と闘うのか、とかな。

つと、そんなことを考えていたらいつの間にか家に着いていた。深く考えてもしようがない。今は腹が減った。親子丼を作って風呂入って寝よ。

と、いうことで俺はさっさと寝ることにした。

第三話。喧嘩っばいのと魔法少年。ついでに俺は紳士だ。(後書き)

そんな文章なんだよ。親子丼美味し。

第四話。空腹と弁当。あの二人は悪魔だと気づいた日。（前書き）

連投という素晴らしさ。だがこのクオリティー。なんだか短いきもする。気のせいじゃなかった。

第四話。空腹と弁当。あの二人は悪魔だと気づいた日。

はい、それで学校。いつも通り遅刻しかけていつも通り先生に怒られる。それで一日が始まる。

今日も今日とて弁当を忘れたことを後悔しつつ、授業を受けていく。暁美さんは何だかキュウベえに熱視線を送っていたのに、いつの間にか俺にその熱視線が向けられていた。ちょっとやめて、なんかすいません。謝りますから！

それで昼休み。弁当が無くて悔し涙を流しているとふと暁美さんが前「今日の放課後の屋上来い」って言う約束を思い出した。そうだなあ・・・暇だから屋上のベンチでゴロゴロしてるか。

と、いうことで屋上に行き、ベンチに寝っ転がる。ああーもう、腹減って死にそう・・・。そんなことを考えているとよく知っている話し声が聞こえてきた。

こいつらは・・・！

ガチャツつと屋上のドアが開く。そこにいたのはまどか、さやか、そしてキュウベえだった。

「あつ、お兄ちゃん！こんな所にいたの？」

「一緒に飯食おうと思うと兄貴、いつもいないもんなー」

「よーう、残念だけど俺は弁当という物が無い。分けてー」

その前にいつもいないのはお前らじゃないか。
全く・・・言いがかりはよせよ。たとえ俺が授業終わったとたん弁

当がないことを忘れて、座り心地が最高なベンチに速攻で行き弁当が無いことに気づいてそこで頂垂れながら寝っ転がってるとしても俺のせいじゃない！

「さらに残念だけど兄貴にやる弁当はない！」

「私もちよつと・・・」

「神は俺を見捨てやがった。恨んでやるぞ」

ナンテコツタイ。俺の平日のお昼時の空腹は一生収まらないのか。

「自分で持つてこないのが一番悪いと思うけど。兄貴はどう思う？」

目の前で弁当の定番、唐揚げを頬張りながらストレートで「てめえが悪いんだよ」と言ってくるさやか。全く持つてその通りなので何も言えない。

「だが言ってみせる！俺は悪くない！悪いのは寝坊させる気持ちの悪い布団と目覚まし時計だ！しかも目覚ましはいつも布団のそばに置いてあるのにほかの場所に吹っ飛んでる・・・まさか！まどか、さやか、分かったぞ！悪いのは俺じゃなくて俺の妹と姉だ！」

最近出てこないと思ったたらそうゆう事だったのか！別に幽霊として家にいても良いけどそうゆう悪戯は勘弁願いたいぜ！姉ちゃんと妹よ。てゆうかその卵焼きを・・・！

「なんでそこで兄貴の妹と姉が出てくるの？・・・てゆうか兄貴に妹とか姉とかいたっけ？」

「よく考えたらお兄ちゃんの家族とか全然知らないもんね」

あるえ？言ってなかったっけ？てゆうことは誰も知らないんじゃない？
・先生は知ってる筈なだけだな。ああ・・・そのミニハンバ
ーグが・・・！

「言ってなかったか？別に面白い家族でもないし、話すことも無い
ぜ？」

「でも、聞きたいな？お兄ちゃんのこと」

「あたしも聞きたい！兄貴の家族って事はなんか凄そうだし」

なにやらものすごく俺の家族の事を聞きたい様子。残念だけどこんな
に明るく弁当食つてるときにする話じゃないんだ。誤魔化させて
もらおう。俺は弁当無くて暗いから話してやりたくてしょうがない
けど。

「ああ、また今度な。もうそろそろ俺の腹がチャイムが鳴ると言っ
てるし。お前らも速く弁当食っちまえ」

といつてももう二人ともほとんど無いけどな。

「むう・・・じゃあ、今度絶対聞かせてよ？」

「そーだそーだ、聞かせろよ。てゆうか今言っとけや！」

さやかは相変わらずうるさいな——キンコーンカーンコーン——
ーっと、チャイムが鳴ったぜ。

「ほらほら、速く片づけて教室に行くぞ」

早足で屋上唯一の扉に向かう。

「ちょっとまってよ。お兄ちゃん！」

「女の子を放っておいて先に行くなんて最低だぞー！」

「はっ！では諸君、サラダバー！」

なんだか叫んでいるが、無視して階段を駆け下りる。

今日は暁美さんとの話もあるし、適当に授業を受けようかな？授業まったく関係無いけどね！

第四話。空腹と弁当。あの二人は悪魔だと気づいた日。（後書き）

「さらばだー！」と「サラダバー！」って良く言い間違えるよね。
てゆうか言い間違える。俺だけそう言っちゃうとか恥ずかしすぎる。
だが俺は紳士だから関係無かった。

第五話。物語の結末と主人公（メイン）の秘密（前書き）

感想が来たのでテンション上がって書いた。ハッキリいってこの回は短いしまらない。多分書き直す。

第五話 物語の結末と主人公（メイン）の秘密

授業が受け終わり、放課後の教室。腹は鳴るが、今日は帰れないという拷問を受けつつも屋上に上ってゆく。暁美さんは多分もういるだろう。

屋上の扉の前で立ち止まる。

よくよく考えてみると、なんで俺は屋上に来たんだけ？暇だったとしても、腹が減っている、勝手に予定は作られた。これだけでも行くとは思わないハズなんだが……。

そうゆう性格だし。……やっぱ気になるのかなー。あの魔法少女だか何だかが。なにかこう、引っ掛かる。キュウベえも色々隠してるっぽいし……。何なんだろう。

考えても分からないものは分からない。それに俺はこんな考えるキヤラでもねーしな。取り合図暁美さんに色々聞くか。

そう思い扉を開けた。

開けた先には随分と悲しそうな感じ暁美さん。ベンチに座っている。こちらに気がつくとすぐに悲しそうな感じは消えていった。

「やっと来たわね。遅いわ」

「そんなこと言うなって。人類の可能性について考えていたら遅くなっただけだ」

「意味が分からないわ。あなたは人類じゃ、ない気もするけど」

「……おい、それどういう意味だ？俺が人間じゃねーとでも言いたいのか？」

「あら？ふざけると思ったけど突っかかってきたわね。何か気になることも？」

「……………誘導尋問かよ。まったく、疲れちまうぜ。」

「まあ巫山戯るのはここまでだ。さて、暁美さん。俺に聞きたいことがあるらしいが何だ？」

「私はまじめだったけれど……………いいわ。聞きたいことは一つ。」

「あなたは何者？いや、なんなの？」

「質問の意図がつかめねえ。そりやどうゆうことだ？」

「そのまんまの意味よ。あなたが何者なのか、なんなのか？」

「……………ちよいとかまかけてみつか。」

「それはお前が何者なのかを知っている俺で話すのか？」

「っ！！……………あなた、知っているの？」

「当たり前。やっぱ何か隠してるな。隠してなけりや何者なんて意味の分からん質問するはずがねえ。」

「知っている？何もしらねーよ。バーカ」

「……………あなた」

「はまってくれてありがとよ。さて、俺からの質問いいか？」

「私の質問は答えてくれないの？」

「俺の質問に答えてくれたら答えてやるよ。じゃあ、質問。お前は
何者なんだ？何を知っているんだ？洗いざらい全部吐け」

「・・・・・・・・キユウベえ。こいつに何か違和感を感じたことは？」

質問に質問で返しやがったよ。なんていけない子。

「キユウベえ事態は怪しすぎるな。まどかが何か起きそうで心配」

あれ？なんでまどかが出てきたんだ？・・・惚れてはいねえーよな。

「そこまで感じているのなら、話しましょう。ただし、信じるか信
じないかはあなたの判断でお願いするわ」

「ふう〜ん・・・なんかありそうだな。いいぜ、信じてやるよ」

「じゃあ、まずは私の事から・・・・・・・・」

放課後は過ぎてゆく。真実は、結末は、二人に託される……。主^メ
人公は何者？その答えは闇に消えながら。。。

第五話。物語の結末と主人公（メイン）の秘密（後書き）

最後に謎めいたこと書きちゃったけど、多分ちよつと考えれば分かること。答えのヒントは・・・ちまちま各話に散りばめておきます。つまんなかったと思うけど、受験終わるまでまってね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3522v/>

魔法少女まどか マギカ 要するにバットエンドは嫌いなんだろう？

2011年12月16日20時49分発行